OCCH
大文研通信 No.20
2001. 12. 28
(財) 大阪府文化財調査研究センター
Osaka Center For Cultural Heritage

久宝寺１号墳現地公開

もくじ

P. 2 ●(財) 全南文化財研究院の関係者が来所
●韓国咸安郡の研究者等が来所
●久宝寺遺跡へサウジアラビアから視察
P. 3 ●久宝寺遺跡で体験発掘
●宿久庄西遺跡で体験学習
●職員の異動
P. 4 ●郷土の文化財を見学する会
●第43回大阪府埋蔵文化財研究会
P. 5 ●久宝寺１号墳　現地公開
●第二京阪高宮遺跡等　現地説明会
P. 6 ●久宝寺遺跡（水処理施設）関係者説明会
●高石市伽羅橋遺跡にて中世前期の“港湾都市集落”発見
P. 7 ●第12回考古学国際交流研究会
P. 8 ●Villa Romana a Cazzanello の2001年度の調査

(財)全南文化財研究院の関係者が来所

2001年11月13日、韓国の全羅南道順天市にある財団法人全南文化財研究院の韓　盛旭研究委員と金　京七学芸研究室長が中部調査事務所を来訪された。

韓国では最近埋蔵文化財の発掘調査を行う財団法人が幾つかできている。今回お二人が訪問された目的は、韓国に先行して発足・活動している日本の埋文関係財団を見聞し、今後の参考としたいということで、当センター以外に近畿に所在する二、三の財団をも数日間の予定で訪問される由であった。

当日は福岡課長、藤田所長、秋山係長が応対し、短時間ではあったが、日本における埋文関係財団が設立されるまでの文化財行政の歴史、当センターの沿革および現状、全埋協のこと、地方分権一括法や公務員派遣法の施行と文化財行政の関係等について説明した。その後、当センターが発掘調査を行っている八尾市久宝寺遺跡へご案内したが、お二人は大規模な発掘調査に目をみはられ、有意義な視察ができたと謝辞を述べられた。

現場を視察中の韓研究委員と金室長

韓国咸安郡の研究者等が来所

2001年12月６日、韓国咸安郡から「阿羅伽倻文化遺蹟踏査団」の一行11名の人達が当センター中部調査事務所を訪問された。案内役は当センターでもおなじみの、国立昌原文化財研究所の李柱憲さんであった。李さんの説明によると、12月３日から７日までの予定で、奈良県、滋賀県、京都府、大阪府の阿羅伽倻に関係のある考古資料や史跡を見学されるとのことであった。

当センターを訪問された目的は久宝寺北遺跡から出土した火焔文透しを施した須恵器の器台を見学されることであった。火焔文透しは咸安地方の陶質土器に特徴的な技法であるが、日本出土の須恵器では当センター出土のものを含めて、数点が知られるのみである。咸安は古代伽倻諸国の中心勢力の一つである阿羅伽倻ゆかりの土地である。踏査団のメンバーは遠い異国で出土した、５世紀の須恵器片１点に、自分達の祖先と関連する日韓交流の歴史を探ろうと、短時間ではあったが、熱心に観察された。その後、当センターが発掘中の久宝寺遺跡を視察し、次の訪問先へ向われた。

現場視察中の遺蹟踏査団の皆さん

久宝寺遺跡へサウジアラビアから視察

11月29日、サウジアラビアからナジラン博物館館長のアブドゥルアジズ氏が久宝寺遺跡に来跡された。これは財団法人日本国際協力センターが主催する「博物館技術コース」研修の一環である。氏は日本の発掘調査体制や現場運営手法などに興味をお持ちであった。今回初めて日本の現場を視察し、自国と日本とでは調査方法や現場運営について両国の間に大きな相違があることに驚かれた様子であった。氏によればサウジアラビアでは調査は主に考古学者が行うため、学術発掘が主体で、行政発掘はほぼ皆無であるという。氏の来跡は私達にとっても海外の発掘方法や遺跡を知るとても良い機会となった。　（南條直子）

アブドゥルアジズ氏と記念撮影

久宝寺遺跡で体験発掘

昨年６月に府立今宮高校から日本史の授業の一環で、夏休み期間中に「考古学実習」という課外授業を設けるため、その場を提供してほしい、という依頼が当センター普及資料課にきた。当センターではこれを快諾し、久宝寺遺跡をその実習場所としてあてた。実習期間は７月30日から８月３日までの５日間である。実習に参加したのは、三年生８名（男子１人、女子７人）と引率の教諭１名である。

実習担当スタッフは当センター久宝寺遺跡担当の技師・専門調査員がこれにあたった。実習内容を外業実習・内業実習・勉強会に分けてカリキュラムを作成した。外業実習は、遺構掘削や遺物の取り上げ、図化作業を行った。遺構掘削では古墳時代前期の土器を大量に包含する河道の掘削や、古墳時代前期の水田中の足跡検出を行った。図化作業は完形の割竹形木棺が出土した久宝寺１号墳で行い、断面図や平面図を作成した。内業実習は事務所内での土器の洗浄から注記、接合までを行った。勉強会は考古学一般と各時代の考古学的成果について、毎日最後の時間帯に行った。勉強会の講師は、生徒に飽きがこないようコマごとに入れ替えた。最終日には生徒達を３グループに分け、これまでの実習成果をもとに自主発表をしてもらった。発表の内容は、図面の作成方法に関して、遺構の掘削方法について、久宝寺１号墳についての３項目である。

希望者を募った結果の参加であったためか、連日の炎天下であったにも関わらず、生徒達は非常に熱中して作業を行っていた。一日の最後のコマである勉強会では、疲れて眠りだす生徒がいるのでは、と当初危惧したがその心配は全く無く、講師がたじろぐような質問が頻繁に出るほどだった。実習終了後には、卒業して大学に進んだら補助員として働きたいと幾人かの生徒が言い出すほどだった。

（奥村茂輝）

自分たちが掘った足跡の前で記念撮影

宿久庄西遺跡で体験学習

平成13年11月７、８日の両日にわたり吹田市立高野台中学校から２名の生徒が現場体験に訪れました。北部事務所では一昨年度から、「職業体験学習」を行っている学校側の要請を受けて生徒の受け入れを実施しています。

今回は宿久庄西遺跡において作業体験を行ってもらいました。最初は見慣れないガリなどの掘削用具を手に戸惑った様子でしたが、遺構から土器などが出てくると夢中になって掘っていました。千年以上も昔の土器と知ると、緊張しながらも興味深く感じたようです。埋土の色や土質の違いで遺構を見つけることには驚くと同時に納得していました。ガリかけなどの作業はかなり疲れたようで、細かい作業ばかりのイメージとは違い、意外に大変な重労働だと感じたようです。両名とも文化財の知識がほとんど無い中での参加だったのですが、作業に携わる中で文化財保護の重要性を理解してくれたようでした。（中尾智行）

ガリをかけて遺構検出だ！

職員の異動

今年度は、年度途中に次のような人事異動がありました。

退職者（平成13年９月末日付）

本田奈都子（技師）結婚退職
三浦　俊明（専門調査員）石川県立歴史博物館へ
山崎　頼人（専門調査員）小郡市埋蔵文化財調査センターへ

新規採用（平成13年８月１日付）

阿河　大介（専門調査員）中部調査事務所　調査第一係
　　第二京阪道路関連
河村　恵理（専門調査員）中部調査事務所　調査第一係
　　第二京阪道路関連
田之上裕子（専門調査員）中部調査事務所　調査第三係
　　久宝寺遺跡

郷土の文化財を見学する会

郷土の文化財を見学する会は、今年度は主に大阪府内の各遺跡を廻りました。９月は東大阪市瓜生堂遺跡、10月は羽曳野市飛鳥周辺、11月は藤井寺市古市古墳群、12月にはバスツアーとして京都府加茂町恭仁京跡から滋賀県信楽町宮町遺跡を訪ねました。以下では12月バスツアーについて述べます。

バスツアーでは、奈良時代中頃に聖武天皇が都を２度３度と移しましたが、どのような場所に都が移したのかを現地で学ぶことを目的としました。当日はいつもより早い８時20分に大阪府立難波体育館前に集合しました。９時30分頃には木津町に入り、木津川を右手に見つつ国道163号線を東に走行し、10時前に恭仁小学校前の駐車場に着きました。大極殿跡には基壇がそのまま残り、花崗岩製礎石と凝灰岩製礎石も一部残っていました。大極殿跡は恭仁京廃絶後山城国分寺の金堂となります。その時に創建された塔跡も見学しました。全国で２番目に大きな礎石を見ながら、塔跡横にある柿の木を背景に記念写真（下の写真）を撮りました。この後これまでに調査された大極殿院北側の２つの内裏地区の跡や朝堂院を区画する掘立柱建物塀のある地区など、現在は水田となった跡を約１時間廻りました。こののち京都府立山城郷土資料館を訪ねました。当館では山城地域の文化財の概要を館員の方から説明していただきました。この後城陽市から国道307号線を通って、滋賀県信楽町宮町遺跡まで一路山の中をひた走りました。宮町遺跡では発掘調査事務所に設けられた展示室で出土遺物を見せていただき、先月現地説明会を行った発掘現場では、長さ100m近くある朝堂院跡の掘立柱建物などを見ながら説明を聞きました。宮町遺跡は四周を山に囲まれて、東側に飯道山を望む山深い盆地にありました。現在は古い水田区画などは失われてれていますが、かつては朝堂院が建てられていた外側を囲うようにして大きな川が流れていました。この後史跡紫香楽宮址とされている甲賀寺跡を訪ねました。このように聖武天皇は山深いところに都を移したことを学びました。

山城国分寺　塔跡にて

第43回大阪府埋蔵文化財研究会

第43回大阪府埋蔵文化財研究会は、2001年９月29日に大阪府教育委員会文化財調査事務所講義室で開催しました。発表は次の８本でした。①久宝寺１号墳の調査（財)大阪府文化財調査研究センター　西村　歩氏、②貝塚市地蔵堂古墳群　貝塚市教育委員会　上野　裕子氏③立部小古墳の調査　松原市教育委員会　芝田　和也氏、④北摂地域の小規模墳　大阪府教育委員会　奥　和之氏、⑤泉州の小方墳　伏尾・野々井遺跡　和泉市教育委員会　白石　耕治氏、⑥古市古墳群における小方墳について　藤井寺市教育委員会　佐々木　理氏、⑦河内平野における古墳時代の墳墓　（財）八尾市文化財調査研究会　原田　昌則氏、⑧長原遺跡の小方墳　（財)大阪市文化財協会　櫻井　久之氏

久宝寺１号墳の調査では、古墳時代前期の割竹形木棺がほとんど腐ることのない状況で出土した調査成果が報告されました。また泉州では貝塚市地蔵堂遺跡での小方墳の出土状況、南河内では松原市立部遺跡の小方墳の出土状況、北摂地域では摂津の総持寺遺跡の小方墳の出土状況やその他の出土状況が報告されました。大型前方後円墳から少し離れた位置に小方墳群が出現していることが再確認されました。また南河内地域では古市古墳群内の小方墳の出土状況が藤井寺市から、八尾市内の小方墳の変遷状況が（財)八尾市文化財調査研究会から示されました。八尾市内の小方墳が築造されたのちに長原古墳群が築造され、そして生駒西麓に築造される群集墳に断絶しつつ、新しい場所に作られて行く変遷過程が示されました。大阪市内では長原古墳群の出土状況が報告されました。討議では、八尾市の報告から八尾市域の小方墳から時期を違えると長原地域に小方墳が築造されるようになったのではないかとの見解が示されました。そして大阪市から長原古墳群が、古代王権の部民の墓ではないかと言う説が出されました。これまでほとんど俎上に上げられたことのない小方墳に焦点を当てた議論が展開され、今後の調査に新しい視点を提供しました。

討議風景

久宝寺１号墳　現地公開

久宝寺遺跡現地公開は８月23日の土曜日に行なわれました。現地公開前日には当遺跡がマスメディア各社で比較的大きく報じられました。また最寄駅の至近距離にあるという地の利も手伝ってか、公開現場には午前中から見学者が集まり始め、最終的には約1,000人に達しました。見学者の大半は地元の一般市民でしたが、府外からはるばる来られた人もいました。

午後一時の開始15分前には、久宝寺１号墳が一番近くで見下ろせる場所がすでに見学者で溢れており、急遽早めに公開を開始しました。そして乾燥防止のために木棺にかけていた布をはがすと、歓声とカメラフラッシュの嵐が沸き起こりました。

見学者の方々は、現場説明や説明補助の指示に「うんうん」と頷きながら、熱心に耳を傾けておられました。

説明は１号墳の調査経過に乗っ取って進めました。そして四隅から出土した直口壷や柵状木製品が空間区画の機能を持つ可能性があり、現在唯一の資料であるなど、代表的な遺物の紹介と説明をしました。最後に今回の調査成果が久宝寺周辺の古墳時代研究へ大きく貢献するものであることをアピールする内容としました。15分程度の説明を５回に分けて行いましたが、その合間には見学者の方々からたくさんの質問が投げかけられました。特に木棺内から２体分の歯が検出されたことに関する質問が多く出ました。

１号墳から出土した直口壷や、祭祀土器を実際に展示した遺物テントにおいても、見学者の方々は調査担当者に積極的に質問をされていました。

今回の久宝寺遺跡の現地公開は、安全の問題上、矢板の上から見学してもらったため、木棺や内部の細かいところを間近で観察してもらえなかったのが残念ではありましたが、何人かの見学者から、「良いものが見れた。説明も分かりやすかった。満足した」という感想が聞け、説明に不備が多々ありましたが、成功を遂げたといえるのではないかと思っています。　（南條直子）

久宝寺１号墳　説明風景

第二京阪高宮遺跡等　現地説明会

11月23日（金）午後１時から、寝屋川市高宮遺跡および大尾遺跡において現地説明会を開催した。当日は好天にめぐまれ、地元の方を中心に約250名の参加を得た。

詰所前において、中部事務所藤田所長の挨拶のあと、両遺跡の航空写真パネルやテント下に展示した遺物をもとに両遺跡の立地や隣接する高宮廃寺との関連、遺構、遺物の全体説明をおこない、その後農道をぬけ、高宮遺跡の調査地へとむかった。

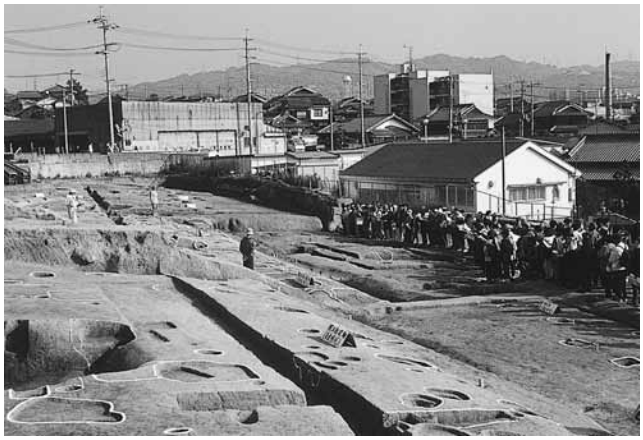
高宮遺跡は生駒山地から西へと延びる丘陵の先端から裾部にかけて立地する。今回の調査では、新聞報道でもとり上げられた、一辺約1.5mという大きな掘形をもつ奈良時代の大型掘立柱建物をはじめ、奈良時代の掘立柱建物、柱列のほか中世の土壙墓、大型土坑、井戸、溝、多数の柱穴が検出されており、これらの遺構を適宜説明しながら丘陵を登り、奈良時代大型掘立柱建物の前では間近に遺構をみながら説明をおこなった。また、現地説明会直前に烏帽子が出土した中世土壙墓も来場者の関心を集めた。

一旦道路へでた後、丘陵頂部の大尾遺跡へと向かった。

大尾遺跡では、弥生時代中期の方形周溝墓、古墳時代後期から飛鳥時代および奈良時代の掘立柱建物、中世の溝、火葬墓が検出されている。１～５区の調査区のうち、５区のみの公開であったが、14基の弥生時代方形周溝墓とその主体部、飛鳥時代および奈良時代の掘立柱建物を説明とともに見学いただき、多くの質問が寄せられた。

丘陵裾部の詰所から高宮遺跡をぬけ丘陵頂部の大尾遺跡まで、道のりは約500m、比高差は約40mあり、大尾遺跡へは急な斜面に設けた階段を昇っての見学であった。移動に時間がかかり、歩きながら説明を聞いていただく場面も多くあったが、常日頃、道路から眺めている遺跡調査地を直接歩くことで感動したという声がよく聞かれた。

なお、大尾遺跡北東に隣接する太秦古墳群の調査成果も現地説明会資料と航空写真パネルおよび遺物展示で紹介し、熱心な質問が寄せられた。　（合田幸美）



奈良時代の大型掘立柱建物前での説明

久宝寺遺跡（水処理施設）関係者説明会

久宝寺遺跡は八尾市の北東部を中心に1.7㎞四方に広がる縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。当遺跡からは主に古墳時代前期の集落跡、古墳が検出されており、特に、古墳時代の準構造船が検出されていることで著名な遺跡となっている。

最近では、平成13年８月に久宝寺遺跡（多目的広場）調査区において､古墳時代初頭の古墳から国内最古と考えられる、ほぼ完全な状態を残す割竹形木棺が検出されたことで注目を集めた。これらのことから久宝寺遺跡は当該地域において重要な位置をしめると考えられる。

今回の調査は寝屋川流域下水道竜華水環境保全センター水処理施設の建設にともなう事前調査として、平成13年４月よりおこなわれている。

調査を進めるにつれ、（水処理施設）調査区においても前述の（多目的広場）調査区の方墳とほぼ同時期の古墳が群集して存在することが明らかになり、結果、13基の古墳を検出した。

このため、平成13年12月１日、大阪府内の教育委員会および全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック、大阪府内の公立埋蔵文化財センターの職員を対象とした現地公開説明会をおこなった。

当日は晴天にめぐまれ、近畿一円より25名が参加された。見学者は遺跡説明開始時刻前から解説用資料を熱心に読まれ、遺構の撮影をおこなうなど、当遺跡に対する関心の高さがうかがえた。

遺跡の解説時や遺構の見学時にはさかんに質疑応答がおこなわれ、当該地域における古墳群の性格、古墳群の広がり方、古墳が築造された時期などについて貴重な意見をいただいた。

今回の説明会では、日ごろ発掘調査に携わっている方々の視点による当遺跡への意見の収集を試みたが、いくつかの問題点を抽出することができ、今後調査を進めるにあたり有益な説明会であったと言える。

（岡本圭司・永野　仁）

関係者説明会　説明風景

高石市伽羅橋遺跡にて 中世前期の“港湾都市集落”発見

高石市高師浜１丁目所在伽羅橋遺跡の府道高石北線建設に伴った発掘調査は、今年度（その３）、約800㎡（延べ1600㎡）を実施した。中世面Ⅱ面の全域で前年度と同時期（13世紀前半～14世紀前半）の集落が大規模に砂堆（通称羽衣砂丘）上に北西方向への広がりをみせることを確認、中世前期の５時期にわたる23棟以上の掘立柱建物や20基に及ぶ井戸、道路遺構・数多くの土坑等を検出した。これらの遺構群にはいくつかのまとまりが認められ、それぞれが、建物（主殿的建物と小建物）・井戸で構成される。建物自体は“つのや”が付く等、大型化していく傾向にある。井戸は泉州では珍しい羽釜（土釜）を積んだ（最大９段積）構造を大半が採る。常滑・渥美窯陶器等、各地の焼き物や舶来の中国陶磁、地元産瓦器や京都系カワラケの大量出土は、都市的要素を表象しており、高石浦・芦田浦（津・泊)、高石神社・大鳥浜神社（現羽衣浜神社）・平安時代以来の住吉街道・南朝の拠点的寺院大雄寺（宿）の存在等、遺跡周辺部環境を総合すると、遺跡の性格は“中世前期の港湾都市遺跡”と位置づけられる。港湾都市遺跡の研究は、近年、海上交通網の上から緒についたばかりで、数少ない調査例であり、今後、系統づけた総合的研究による進展が期待される。

このことについて報道提供し、産経新聞・毎日新聞・読売新聞・朝日新聞に12／14・15付で取り上げられた。

伽羅橋遺跡（その３）現地説明会並びに遺物展示報告会を2001（平成13）年12月15日（土曜日）に発掘調査現場４区：第１会場・高石市立高師浜公民館集会室（遺物展示場）・実習室（スライド映写説明会）：第２会場　にて実施した。Ａ４判オールカラー８頁資料を配布。現場公開の後、スライドによる説明会と遺物解説とをおこなった。遺物は、2000年度のものを中心に約750点を展示。諸般の事情で大半調査区の埋め戻しをおこなわざるを得ず、遺構全体・細部の見学等をしてもらえなかったのが、残念であった。

暖冬が続いていたが、当日は厳しい冷え込みと季節風が吹きまくる最悪のコンディションとなった。にも関わらず、計237名の参加を得た。内訳は、地元高石市116名［48.9%］と他和泉地域42名［17.7%］・河内地域14名［5.9%］・摂津地域12名［5.1%］・大阪市内13名［5.5%］・その他府内23名［9.7%］と、府外17名（奈良７・京都６・兵庫３・岡山１）であった。他府内の多くは高石市民と思われる。当日の朝刊で取り上げられたこと・町内会の掲示の効果もあり、６割近くが地元民と考えられる。他地域からの参加は、前々日の当センター文化財講座での宣伝効果と思われる。遠方よりの研究者の参加もあった。男女比：男147：女90［約5：3］。年齢別比では、50～69歳が50%と全体のちょうど半数を占める。学生層は10%に満たない。

情報化社会の中、ホームページの開設構想、報道提供のあり方や現地説明会案内（ピーアール）の方法など、今後、再考の必要を示す結果を得たと言えよう。　（田中一廣）

第12回考古学国際交流研究会

2001年11月14日（水）～20日（火）の6泊7日の日程で国乗和雄、阪田育功、村上富喜子が韓国を訪問しました。

研修は①整理・報告・遺物保管システム、②遺跡の保存と整備を主要なテーマとし、公式訪問としては釜山大学校博物館および嶺南文化財研究院を訪問しました。

日程と見学・交流先

11月14日：関西国際空港～金海国際空港、金海市役所の宋　源永氏の案内により、金海市内の金海貝塚、鳳凰台東遺跡、金海市史跡公園整備事業現場を見学。金海大成洞古墳の現地を見学後、国立金海博物館見学。金首露王妃の墓を見学。

11月15日：釜山大学校博物館見学。福泉洞古墳群および博物館の見学。

11月16日：嶺南文化財研究院訪問。当施設の遺物展示を見学。大邱市の体育学校建設予定地である東湖洞遺跡、浄水場建設予定地の汶山里古墳群を見学。

11月17日：陵山里古墳群前の模型館、憙宝寺址、陵山里古墳群を見学。扶余博物館、定林寺、宮南池見学。扶余博物館学芸研究士　金　賢晶氏の案内により松菊里遺跡の現地見学。国立公州博物館、宋山里古墳群、武寧王陵見学。

11月18日：国立中央博物館見学。

11月19日：昌慶宮、風納里土城、岩寺洞先史遺跡、夢村土城、石村洞古墳群、芳夷洞古墳群見学。

11月20日：昌徳宮見学。仁川国際空港～関西国際空港。

研修内容

①整理・報告・遺物保管システム

汶山里遺跡の発掘調査現場では現場事務所で出土遺物を洗浄、復原していました。若干の違いはあっても、基本はセンターと似たような状態と思われます。嶺南文化財研究院では展示室が1部屋ありましたが、関係者のための保管展示といった印象をうけました。

現場では若い女性担当者の姿も見受けられ、日本とあまり違いを感じませんでした。ただ、発掘担当者達からは意欲的でひたむきな姿勢のようなものが感じられました。

②遺跡の保存と整備について

実物の遺構展示は中断あるいは断念している状況と思われます。宋山里の壁画古墳もかつては公開されていましたが、現在では保存のために閉鎖されています。また福泉洞古墳群では、遺構は埋めて保存し、その位置を植栽で表示する手法をとりいれており、遺構展示館で模型を見学できるようにしています。

大成洞古墳群は調査後も未整備で、保存策も特に講じられていません。また、宮南池は木柵や板で仮設的な園路整備が行われていましたが、現代的な街燈が景観にそぐわないなど、修景の技法には、なお研究と改善の余地があると感じました。

③その他

現場での安全基準が日本と少し異なっているようです。例えば内部に階段や足場板のみられない写真撮影用足場の存在、消防の出初め式もどきに2つの梯子を組み合わせた脚立上での写真撮影、素掘りの幅狭でかなり深い試掘坑など、現場での安全管理意識が比較的薄いように見受けられました。

整理・報告・遺物保管システムについては、公式訪問先の嶺南文化財研究院で質問する予定でいましたが、事前打ち合わせがうまくできておらず、現場見学の方が主体となり、質問する機会を失ってしまいました。しかし、センター職員の公私にわたる交流のおかげで、金海市の宋氏や扶余博物館の金女史を紹介していただき、金海市内の発掘調査現場や松菊里遺跡などを見学することができました。

今回の体験を通じ、人と人の交流が大切であると感じました。そして、韓国の方たちの親切な対応で、今回の研修出張が一定の成果を得られた事に深く感謝しています。

（国乗和雄・阪田育功・村上富喜子）

汶山里古墳群を見学

扶余　宮南池

Villa Romana a Cazzanelloの2001年度の調査

本調査は、東京大学青柳正規教授を代表に、科学研究費補助金により行われている調査で、毎年度、当センターからも、短期間ながら参加者を出している。

ヴィラ・ロマーナ・カッツァネッロは、イタリア共和国ラツィオ州ヴィテルボ県タルクィニアに所在するローマ時代の貴族の別荘の遺跡である。

ローマから西の海岸に出ると、その外港でもある港町、チベタヴェッキアがある。支倉常長が1615年ローマ法王に謁見するため上陸した地でもあり、その銅像も建てられている。今も貿易と漁業の盛んな街である。

その北の、人口一万人ほどの街がタルクィニアである。丘陵上に立地し、今も中世からルネサンス期の城壁、塔、教会が残る、典型的なトスカーナ地方の城砦都市である。

同じ丘陵上にはローマ以前にイタリアで最大勢力であったエトルリア人の地下式墳墓群、ネクロポリがある。この地名は「死者の街」という意味で、イタリア各地で古代から中世の墓地が所在する場所に付いている。

ここでは地下に掘られた玄室が幾つも公開されており、アルカイックでカラフルな壁画を見る事ができる。

カッツァネッロは市街地から離れ、北西の海岸にある。海岸には防風林があるが、遺跡はそれより海側にあり、標高４m未満、砂浜より30mほど東へ行った所にある。

地盤は砂であるが砂丘地形は周辺に一切見られない。東側の海岸平野もラグーン状の凹地の痕跡はない。

別荘の遺構は西側の海に向き、東側は長方形の中庭に回廊が巡る形で、そこから八葉形の大広間を抜けて西に出ると半円形の回廊が巡る前庭がある構造になっている。

今年度は前庭の南側で、浴場の施設が集中している部分の構造の解明と、今まであまり調査の進行していない、北側の調査を進める事を中心に行われた。

浴場は、典型としては中心の部屋の四壁に前室、温浴槽、冷浴槽、サウナなどが付随し、上部構造は大きなドームに小さな半ドームが付随する形で、平面形としては八角形の部屋に「U」字形の小部屋が付随する形になる。

床は二重構造で、地下に燃焼室の床があり、そこから幾つも柱を立て、その上に厚いモルタルで床を敷く。壁には中空煉瓦を上下方向の管になるように貼り、燃焼室の熱気を通し、壁も暖める工夫がしばしば見られる。

本年度は、各部屋の前後関係がある程度把握出来てきて、度重なる改築で複雑になっているこの部分が、当初は先述の浴場の典型的な形に近いものであった事が判明してきた。

また、その外側を巡る地下通路から、幾つかの部屋に通じる焚口が確認され、地下での、おそらく奴隷による、作業の実態が見えてきた。

もう一つ重要なのは、トイレらしき小部屋が確認された事である。その部屋は浴場などからの排水が集中し、部屋内の溝を流れてから外に出るようになっている。

北側部分では、半円形回廊に方向を合わせた部屋より下に、別荘の主軸に方向を合わせた部屋の存在が判明した。さらにその壁に、中空煉瓦が張られており、北側でも、燃焼室など地下構造がある可能性が高まった。

またその床面に張られた、大理石に似た石灰岩のタイルによる文様が共和制末期のもの、特にポンペイの秘儀荘に類例がある事が分かってきた。

半円形回廊では、前から船のモザイク画が知られていたが、さらに、漁をする人物の絵が検出され、東側中庭の回廊が、猟など陸に関するテーマのモザイク画で構成され、この回廊は海をテーマする事が分かってきた。

またこのモザイク画はカラカラ帝の頃に流行した復古調の画風である可能性が高いとの事である。

調査に参加してみて、日本と異なる調査方法や、近代にまで地表に露出していた建築遺構など、興味深い事が多かった。また、調査や保存に関して、長期的にフレキシブルに考えているイタリアの体制が羨ましくもあった。

また、この遺跡の構造が、はるかに新しいはずの日本の古代の遺跡より、日本のやや古めの現代人となりつつある私にとって、はるかに生々く感じた事は、ローマを源流とするヨーロッパ文明がいかに濃厚に我々に影響しているかを気づかせてくれた。　（三宮昌弘）

前庭半円回廊　北側から南を見る

浴槽一例　左に階段、右に排水溝あり